

都市と宗教

—銀座稲荷空間からみた伝統宗教空間の意味と聖なるもの—

建築学専攻
建築設計研究

うるしはら しおり
MJ22024 漆原 史織
指導教員 小埜 芳秀

序章 はじめに

0-1 研究背景

伝統宗教空間と日本人の奥底に沈んだ古来の宗教観がぶつかり都市にはおかしい形態を生み出している場所があった。

0-2 研究目的・手法

【研究目的】

現代日本人の宗教観が生み出した稲荷神社を調査・分析し、銀座における聖なるものを留める。

【研究手法】

第一章にて東京にある不思議な宗教空間を例に挙げ、都市化と宗教の関わりについて述べる。第二章では銀座稲荷神社を調査し、歪んだ宗教空間が持つ特別な意味を調査していく。第三章では都市化によって改変された銀座稲荷における聖なるものを分析する。第四章はそれらをもとに設計を行い、銀座に稲荷を留める。

第一章 宗教を排除する都市

1-1 日本人の宗教観

現代では、多くの日本人は、無宗教であると言われる、そう自覚している。しかし少なからず、人生の変わり目、分岐点で信仰を必要としている。

1-2 都市化における宗教の世俗化論

人間が合理的に行う都市を発達させることは、人間が宗教を排除することと同じことであると言える。また、人口移動が多く起こる都市部では、共同体の解体によって宗教の存在が希薄になるのは、日本においても明白な事実である。

1-3 小結

都市化と世俗化によって、奥深く神に対する信仰心が潜った。しかし宗教空間の完全排除は許さず、都市化がぶつかり、空間の歪みが生まれた。そこで、激しい都市化の中でも変化を続けて伝統宗教空間が残ってきた銀座稲荷を調査し、それらが持つ特別な意味を調査していく。

第二章 銀座稲荷の調査

2-1 銀座の歴史と伝統宗教

銀座には、稲荷神社が主に存在する。2023 年現在確認できる稲荷神社は 18 社あり、過去に 43 社

存在したことを確認した。現在残っている稲荷神社は銀座の変化とともに、興味深い形態に変化しているものが数多くある。

2-2 各稲荷の歴史と現状の詳細

各稲荷神社の歴史、遷移、そして現状を銀座の方々に聞き込みを交えて調査した。方法はメール（6 件）、電話（3 件）、対面でのインタビュー（6 名）である。さらに、それらの調査情報をデータシート化した。（図 1）



図 1：歴史・位置などの情報のデータシート

2-3 各稲荷空間の形態分析

現地計測を行い、アクソメ図を作成。さらにデータシートを作成し、分析を行った。現在の銀座稲荷の形態は、各稲荷の周辺のビルや路地を利用して一般的な神社とは全く違った多種多様な形態をしていた。（図 2）

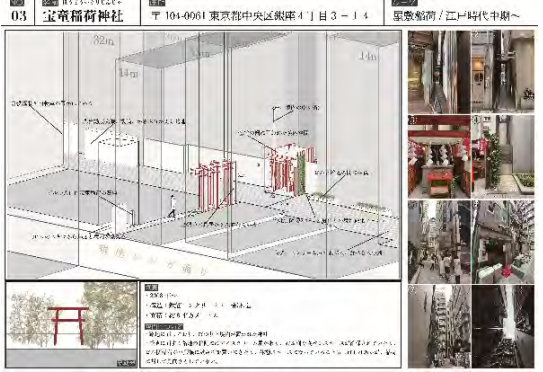


図 2 空間分析のデータシート

2-4 銀座稲荷の境内空間と地主の推移

各稲荷神社の境内の変化と土地の持ち主の変化をそれぞれ表にまとめた。銀座に数多くの災害や大きな変化があっても、人々はどのような

形でも稲荷神社を残すことに注力してきた。

2-5 稲荷と人々の関わり

現在の各稲荷神社の祭祀集団がどれぐらいの範囲に分布しているか、また、稲荷神社を中心とした活動の有無を調査した。影ながらも信仰を集め、活動が行われている。

2-6 小結

銀座稲荷は、現代の日本人の奥底にある宗教観や、都市に対する反発、そして多くの災難に耐えながらも、神に祈りながら人々が生きてきた歴史が混ざりあい、都市空間に数多くの特殊な空間で現れている〈装置〉である。それは、「銀座の神学的ランドスケープ」という重要な意味がある。

第三章 銀座稲荷における聖なるもの

3-1 神学的痕跡

直接神に結びつく空間や物質以外にも、稲荷の独特な形態を作る空間や物質がある。そのような空間・物質は痕跡として銀座には散らばっており、神学的痕跡と定義し、分析した。(図3-4)



図3：物質



図4：路地

3-2 ハレとケの往来

「ハレ」は清浄性・神聖性を示す。「ケ」日常性や世俗性に使われる。銀座稲荷は同一空間上に「ハレとケの往来」があるといえる。例えば、路地空間は現在、ビルの環境を維持する為の装置の場所、または自動販売機などが置いてあり、ビルで働いている人のための裏動線、ゴミを出す場所、喫煙または休憩場所となっている。なので、ビルに従事する人のための裏側である「ケ」といえるが、同時に参道という神聖な領域性質を持った「ハレ」の空間となっている。よって、神学的痕跡を見ていくと、銀座の「ハレ」は稲荷神社の参拝、祭りであり、「ケ」は設備や裏動線、裏側、銀座に従事する人々の空間である。

3-3 結論

何もかも簡単に手に入れられるようになった現代の消費社会、宗教と共に薄れてしまった「ケ」の中の「ハレ」の感覚が銀座の中にはある。それは、銀座の稲荷神社を構成する神学的痕跡の物質・空間が、都市化を受け入れながら神域を作り

上げる「寛容性」があるからといえる。つまり、いつでも転換する機会を持っている空間、物質で構成されている。その結果、「ハレとケの往来」が起こり、これが銀座稲荷における「聖なるもの」なのである。

第四章 プロジェクト

4-1 設計概要



図5敷地

7丁目6番地の開発により分断された路地にはかつて二つの稲荷が存在した。一つは行方不明で、もう一つはビル化に伴って屋上に移動し、確認不可となってしまった。(図5) この場所に、これまで調査した「聖なるもの」を手法として、稲荷空間を新たに予想外の空間として残していく設計を行う。そして、ビルの上に存在する宝珠稲荷神社にお参りするための儀式や儀礼を行う場をビルの要素や設備、稲荷神社跡を利用し、参道を計画する。

4-2 設計提案

銀座の一つの用途や意味しかない、屋上にある塔屋や大地からつながる非常階段をメインに、新たに稲荷のレイヤーを重ねることで「寛容性」を与え、「ハレとケの往来」を演出する。また、交通の都合上廃止されてしまった、かつて至る所で執り行われていた稲荷神社の大祭の文化を復活させる。

第五章 結びに変えて

5-1 総括

東京の至る所に存在する伝統宗教空間。現代人にとっては文化的にただ残しているものとして見ているかもしれないが、一つ一つ見ていくと存在する意味を持っている。銀座稲荷を見ていくと、都市は神の空間と複雑に絡み合い成り立っている。都市にとって必ずしも合理的な場所のみが必要ではなく、伝統宗教空間など非合理的な場所こそが人間が必要としている場所であるということを忘れてはならない。

主要参考文献

- 1) 石井研士「銀座の神々」1994年
- 2) 中山繁信「現代に生きる「境内空間」の再発見」2000年
- 3) 岡本哲志「銀座四百年」2006年
- 4) 銀座タイムズ社「銀座年鑑(昭和31年版)」1956年